

ブランドの変遷を左右してきた4つのドライバー



神奈川大学

明確なコンセプトに基づき設計された新キャンパスが女子志願者増の要因に



国際日本学部教授
入試センター所長
駒走昭二氏



事務局次長
福元摩湖氏

2021年、みなとみらいキャンパス開設

神奈川大学は2021年4月、横浜市のみなとみらい地区に地上21階、地下1階の都市型キャンパス「みなとみらいキャンパス」を開設した。ビジネス、商業、観光の中心地であるみなとみらいの特性を活かし、「この街すべてがキャンパスだ」を標榜するこの新拠点は学生募集にどのような影響をもたらしたのだろうか。

同大学が長年課題としていたのは女子学生の獲得。事務局次長の福元摩湖氏は同大学の取り組みをこう振り返る。

「かつては、本学はどちらかというと男子が進学する大学というイメージがありました。そこで、女子が学びたい内容の学部・学科を作ろうということで、2006年に人間科学部を開設。さらに外国語学部国際文化交流学科(2020年から国際日本学部)を開設しました。その後も継続的に女子学生比率を高めるための施策を進めています。みなとみらいキャンパス開設もその一環です」

その結果、女子学生の比率は年々着実に増加(図)。2013年度と2022年度を比較すると、女子学生比率は27.0%から32.0%へと5ポイント上昇した。入試センター所長の駒走昭二教授はその要因を以下の4つに整理する。

①建築学部の開設(2022年4月、学科から学部に昇格)

②人間科学部で国家資格・公認心理師対応カリキュラムがスタート(2020年度)

③地元高校生へのアピール

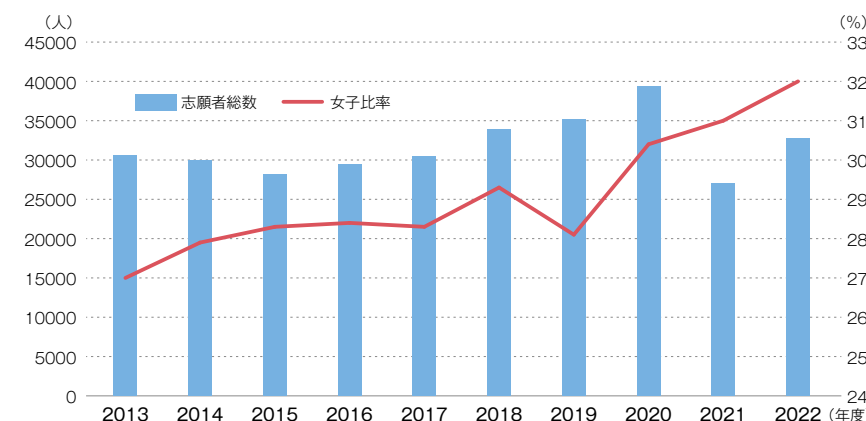
④みなとみらいキャンパスの開設(2021年4月開設)

「建築は一般的に男性的なイメージがありますが、暮らしに関わる分野ですから、当然ながら女性の視点も求められます。学部化したことで、学びの多様性を女子にも訴求しやすくなったと思います。また、公認心理師も女性に人気の高い資格。さらに、一般的に女子生徒のほうが地元志向が強いこともあり、地元高校生へのアピールも女子の志願者増につながっています。加えて、新キャンパスですね。女子生徒は、やはり『きれいなキャンパスで学びたい』『おしゃれな街で学生生活を送りたい』という志向が強い。2020年度の志願者増には、翌年の新キャンパス開設が大きく影響したと分析しています」

多様な人が交流する「知の拠点」を目指す

みなとみらいキャンパスには、経営学部、外国語学部、国際日本学部というグローバル系の3学部が置かれている。2020年に新設した国際日本学部の検討とあわせて、「グローバル教育にふさわしいキャンパスを」という狙いでみなとみらいというエリアを選択したと福元氏。近隣には

図 神奈川大学の志願者数と女子志願者割合の推移(2013～2022年度)



女子志願者の割合はこの10年間、ほぼ右肩上がり増加。2021年度は大学入学共通テスト導入の年で、私立大学の多くが志願者数を減らしたが、神奈川大学は翌年度には大幅回復に成功している

グローバルに事業を展開する企業に加えてJICA横浜、横浜美術館、横浜能楽堂等、国際活動や国内外の文化・芸術に触れることができる施設が多数あり、学外でも体験的な学びを広げている環境が整っている。授業でも学生を近隣施設に引率し、見学すること等が行われているという。

また、同キャンパスは、「未来『創造・交流』キャンパス」として、あらゆる「人」が集い、「知」が交流する、グローバル、ダイバーシティを象徴する拠点となることを目指し、ハード、ソフト両面で多様な工夫が凝らされている。

人の交流を促進するオープンな空間設計

1～3階は「ソーシャルcommons」として一般の人々にも開放(取材時はコロナ禍のため一時的に1階のみの開放に限定)。このエリアに企業・自治体との連携の窓口となる

吹き抜けの階段空間に設けられたプレゼンフィールド。授業や発表に参加していない教員・学生も気軽にその様子を見ることができる



社会連携センター、外国人教員と学生が英語で会話できるグローバルラウンジ、「観光をフィールドとする教育と研究の体現の場」である観光ラウンジ等を設置。

4階より上層の階でも、学生と教員、学生同士の交流が活性化されるようオープンな空間設計がされている。

「1学部が3フロアを使っているのですが、この3フロアは吹き抜けの階段空間でつながっています。このスペースにオープンな環境で発表や授業ができるプレゼンフィールドを設置。通りがかった学生が発表や授業を覗いていくことも少なくありません」(駒走氏)

また、各階にラーニングcommonsを設置。さらに2～3階の図書館以外にも各階に書架を設け、1階には経営学部の学生等が3Dプリンタを使ってプロトタイプ作りに取り組みめるファブラボも設けられている等、学生が自主的かつ自由に学べる環境が整備されている。

このように明確なコンセプトに基づき、ハードとソフトが噛み合った空間設計は、在学生の学びへのモチベーションを高めると同時に、高校生への訴求につながった。

現在も学生はこの環境をうまく活用しているというが、「外国人観光客や外国人留学生が増え、ソーシャルcommonsも一般に全面開放されるコロナ禍明けこそ、みなとみらいキャンパスの本領が発揮されると考えています」と駒走、福元両氏は今後を展望する。(文/伊藤敬太郎)